

妹一年生
（四月号）
（試読版）

登場人物



青城真弥（あおき まや）
・一八歳の少年。玉条学園□等部一年生。



青城真奈（あおき まな）
・真弥の妹。玉条学園□等部三年生。



青城真理（あおき まり）
・真弥と真奈の母親。デザイナー。



白川秋奈（しらかわ あきな）
・青城家の隣人。真弥の同級生。



白川春香（しらかわ はるか）
・秋奈の姉。玉条学園□等部四年生。



チサト

- ・撮影スタジオ「クローチエ」のスタイリスト。



蘇芳薫（すおう かをる）

- ・玉条学園□等部分校の校医。



萌黄妙子（もえぎ たえこ）

- ・玉条学園□等部分校の教諭。真弥のクラス担任。



桃井有珠（ももい ありす）

- ・真弥の同級生。



黒崎信乃（くろさき しの）

- ・真弥の同級生。



赤穂李枝（あこう りえ）

- ・真弥の同級生。

朝礼

春暁のまどろみほど、心地の良いものはない。

「んうっ……」

青城真弥は小さくうめくと、ベッドの中で軽く体を動かし、腰の位置をずらした。その拍子に寝間着が脚に絡みつき、真弥の意識が覚醒へと向かう。

(ん……もう、朝か……)

(そういえば今日は、入学式だっけ……)

薄闇の中で目を開け、ベッドの天蓋を見上げながら、真弥はぼんやりと考える。

この春から、真弥は女子△学生として、私立のお嬢様学校に通うことになっている。今日はその、入学式当日だった。

(学校生活、いったいどうなるんだろう……)

不安になりながら寝返りを打ったところで、ふたたび寝間着の裾が脚に絡みつき、真弥は今の自分の格好を思い出した。

真弥が着ているのは、淡いピンクのナイトドレス——いわゆるネグリジェだ。

大きく開いた襟ぐり。前ボタンの横にはピンタックが並び、それが一番下——たつぷりとフリルの付いた裾まで続いている。袖はパフスリーブで、ゴムによつて窄まった袖口にもフリルがあしらわれており、まるで童話のお姫様のようなネグリジェだ。

(こんな可愛いネグリジェ、今どき本当の女子△学生だって、上級生にもなれば着てないのに……僕が着てるだなんて、絶対に変だよね……)

真弥は顔を赤らめる。

学年的には何も問題はないし、外見的にも、見苦しいところは全くない。

睫毛が長く、ぱっちりとした目もと。

ほんのり赤く、しもぶくれのほっぺた。

耳の半ばほど切りそろえ、そこから下を剃りあげている古典的なおかつぱ頭。

まるで昭和の婦人雑誌に掲載されている少女のような容姿の真弥には、少女趣味なネグリジェがよく似合っている。

強いていうならば、身長がいささか高いことか。ネグリジェのサイズは一四〇。同デザインではこれが最大サイズで、対象年齢の低さがうかがえる。

対して、真弥の身長は一四七センチ。華奢な体格とはいえ、サイズの小さいネグリジェを無理して着ているため、あちこちがきつくなってしまうていた。

胸元や腰回りはびちびちに張り付き、身じろぎしたり、寝返りを打ったりすると、肌に絡みついて存在感を主張する。

そのせいで、真弥は暗闇の中でさえネグリジェのディテールを想像してしまい——
(う……)

(なんだか、勃起してきちゃった……!)

ネグリジェの内側、少女用のインゴムショーツの中で、少女にはありうべからざる雄器官がむっくりと頭を擡げはじめた。

——青城真弥は、本当は、少女ではない。

れっきとした、一八歳の少年だ。本来であれば高校を出て大学に通うはずが、半月前の引越しの際、「役所の手違い」によって少女としての住民票が作られてしまい、紆余曲折の末に、母親のコネがあるお嬢様学校・玉条学園□等部への入学が決まったのである。

そして入念な準備の上、新居に移ると同時、真弥の「△学一年生の少女」としての生活がスタートした。髪型は古典的なおかつぱに変えられ、今まで来ていた男物の服はすべて処分されて、女子△学生が着るような服と下着で過ごす日々が始まったのだ。

一八歳の少年としては、あまりにも恥ずかしい生活。

だが、問題はそれだけではなく——

「はあっ、んっ……」

真弥は次第に荒くなりそうな息を押しとどめ、ちらりと左隣のベッドをうかがう。

そこには妹の——いや、ここに移ってからは、学年的に二つ上の「お姉ちゃん」である真奈が、気持ちよさそうな寝息を立てていた。

兄妹とあって真弥によく似た少女だが、こちらは年齢相応の一三〇センチ足らず、頭の左右でくくったトレンドマークのツイントールが可愛らしい。もつとも、寝ているあいだはほどいて、長い髪を枕元に広げていたが。

今までの家では別室で寝起きしていたが、新居になってからは、真弥は真奈と同じ子供部屋で生活している。かなり広い一二畳のスペースをカーテンで半分に分けて、入り口側は勉強スペース、奥側は寝室スペースになっているのだ。

いま二人が寝ているのは、寝室側のスペースだ。部屋の奥側に頭を向け、天蓋付きのダブルベッドに枕を並べて眠っている。

むろん真弥には、隣で妹が寝ているからと言って、いたずらしたり、セクシュアルな気分になったりするような趣味はない。

問題は、妹の格好だ。

彼女もまた、真弥と同じようなネグリジェを着ていた。しかしその色は水色系——本来の兄妹の配色とは逆の状態で、それが真弥の羞恥心をかき立てるのだ。

(僕のほうが本当はお兄ちゃんなのに、ピンクを着せられてるんだ……)

考えるとまた、股間が甘く疼いてくる。

女兒服を着せられることの、最大の問題。

それは真弥が、少女用の制服や女兒服を着ると昂奮し、少年の——いや、雄の証と呼んで差し支えないほど大きいモノを、勃起させてしまうことであつた。それはとても我慢できるものではなく、そのたびに、恥辱に満ちた射精を繰り返していた。

玉条学園の制服が届いた日、初めて着用したときは、自らの手で。

おかつぱ頭にされ、少女用のワンピースを着せられた時は、美容師の手によって。

入学試験を受けたときは、担任予定の先生の手によって。

そして——ふりふりのメイド服を着せられた時は、ついに妹の手によって。

女装も、女装しての射精も、恥ずかしくて恥ずかしくてたまらない真弥だったが、それでも昂奮してしまうものは抑えようがない。少女のような顔立ちと小柄な体格に似合わない、それだけは人並みの大きさを誇る真弥の男根は、いったん勃起を始めるととても隠し切れなくなってしまう。そのため、恥ずかしがるのが、嫌だろうが、射精しないことには怒張を鎮められないのである。

そして、今もまた——

「んっ、んう……」

喘ぎそうになるのを、妹に知られないように必死にこらえた。

着ているネグリジェを意識しただけで膨らみ始めた雄蕊は、たるみの少ない包皮が剥けて、内側から亀頭が露出する。感度の高まっているその表面が、コットンショーツを擦りながら押し上げると、その刺激でさらにいきりたってしまう。

今や最長サイズに至った怒張はショーツにテントを張り、ネグリジェどころか掛布団の上からでも判ってしまいそうなほどだ。

(だ、だめ……)

真奈のほうに背を向けて横を向き、奥歯をかみしめる。

(妹に、勃起してるのを見つかるわけには……)

(見つかったら、また、いつもみたいに……)

奥歯をかみしめて息を整え、手で勃起を押さえようとするが、焼け石に水。それどころか、亀頭がこすれた刺激で痙攣してしまい、怒張が止まらない。じかに触ってもいけないのに、ショーツの肌触りだけで絶頂に達しそうになっていると——

「真弥ちゃん、おはよ」

ふいに背後から、妹の体温がぴったりと密着していた。

「ま、真奈……いつから、起きて……」

「こーら、真奈お姉ちゃん、でしょ？」

背中にくつんと、少女の額が当たる感触。

真弥が「妹」になることが決まってから半月、真奈はすっかり「お姉ちゃん」としての自覚に目ざめていた。あれやこれやと世話を焼き、注意して、「可愛い妹」の模範となるように、しつかり者へと成長していた。

それがまた真弥にとっては恥ずかしく——しかし同時に、「妹」として扱われることに慣れ、まんざらでもない自分が余計に恥ずかしい。

「う……うん、真奈お姉ちゃん、おはよう」

「はい、おはよう」

真奈はベッドの上で上体を起こし、横を向いている真弥の様子から、何かを察する。

「ねえ、真弥ちゃん。今朝も、おちんちんが腫れてるの？」

「う……そ、それは……」

「やっぱり！ もう、おちんちんが腫れたらちゃんとお姉ちゃんに言わなきゃダメですよ！」

「で、でも、その、一人でも鎮められるから……」

真弥は妹に背を向けて、ネグリジェの前を押さえながら、小声で抗議する。

しかし真奈は腰に手を当て、小さな胸を張って、

「だーめ！ お姉ちゃんに任せなさい！ ほら、見せてっ！」

「い、いいって！ これくらい自分で……」

「またそうやって意地を張って……そういう妹には、こうよっ！」

真奈はひょいと自分の掛布団をはねのけて、ベッドのそばにあるシェードランプを点けると、さらに真弥の掛布団もはねのけてしまう。

「ひゃあっ!?!」

悲鳴を上げるが、もう遅い。

闇が払われ、掛布団をはがれると、露わになるのはネグリジェを着ている自分の姿。いくら判っていることとはいえ、目の当たりにすると、勃起がさらにぐうつと膨らむ。

しかも身を起こした拍子に、ネグリジェの前を見られてしまい、

「わあっ、真弥ちゃん、今日も朝から元気！ やっぱりこれは、真奈がシャセイさせてあげないとだめね」

「いいって、ほんとに！」

慌てて再び横を向こうとしたところで、

「こら、大人しくするのっ！」

ベッドの上で体を躍らせた真奈が、真弥のお腹のあたりにまたがった。真弥の顔に背を向けて、自分は勃起を見下ろす形だ。

「うっ……」

マウントを取られて、真弥は身動きが取れなくなる。

その気になれば跳ねのけられない腕力差ではないのだが、「お姉ちゃん」の威厳には逆らい難い。

さらに下手に動くと、おなかのあたりに真奈のお尻や股間、太腿が密着する。妹の体に欲情するような性癖はない真弥だったが、少年の体は正直だ。お互いのネグリジェ越しとはいえ、少女の重みと体温がおなかのしかかると、思わず生理的反応を示しそうで、真弥はにつちもさつちもいかない状態に陥る。

真奈は腕組みして振り返ると、満足げに鼻を鳴らし、

「もう……だいいち、毎朝お姉ちゃんがシャセイさせてるんだから、今さら恥ずかしがることなんてないじゃない」

「そ、それは、そうなんだけど……」

真奈の言うとおりだった。

新居に移ったあと、真弥は朝勃ちを見つかるたびにこうして「お姉ちゃん」に処理してもらっていた。じっしつ、ほとんど毎日だ。だが、それでも決して、恥ずかしさに慣れることはできない。無駄とわかってても抵抗するのは、フルタイムで妹扱いされている真弥に残された最後の意地だ。

しかし真奈は、そんな「妹」の葛藤などお構いなして、

「もう……そんな意地っ張りの真弥ちゃんは、こうだよ！」

「あうっ……！」

勃起の先端を指ではじかれて、真弥はびくつと腰を躍らせる。亀頭へのダイレクトアタックもさることながら、亀頭が前後に揺れてネグリジェにこすれ、絶頂からそのまま射精に至りそうになってしまう。

「はあっ、はあっ……」

「判った？ 真弥ちゃんのおちんちんは、真奈がシャセイさせてあげるの。判ったら、お姉ちゃんにお願いしなさい！」

「う、ううっ……」

真弥は半泣きになるが、生理的反応はいかんともしがたい。また世話好きの「お姉ちゃん」がそうそうあきらめるとも思えず、毎朝の「お願い」を口にする。

「お、お願い、真奈お姉ちゃん……」

自らを辱めるような、その言葉を。

「真弥のおちんちんを、いいこいいこして、シャセイさせて鎮めてちょうだい……」

「うんっ！ お姉ちゃんに、任せなさい！」

満面の笑みでそう言うと、真奈は再び背を向けて、足首まで届くほど長い真弥のネグリジェを、地引網のように引っ張り始めた。

ずるずるっ、

とネグリジェが手繰り寄せられるたびに、勃起の頂点で露出している亀頭の表面が、ショーツ越しに擦られる。絶頂に至るほどではないこそばゆさに、

「ん、ん、んっ……!!」

腰の奥から先走りがあふれ出し、尿道を通過してショーツを濡らす。

それでもやがて裾の末端まで到達し、インゴムショーツが露出した。

「ふふっ、真弥ちゃんのおちんちん、真っ白なばんつの中で、すっかりおっきくなっちゃってる。先っぽが濡れて、パンツがやぶけちゃいそう」

「う……」

説明されるとその情景を想像してしまい、またそれを妹に見られていることを考えると、余計に激しくいきりたってしまう。

真奈は背中を向けたまま、

「それじゃあ真弥ちゃんのおちんちん、お姉ちゃんに見せて。すぐになでなでして、気持ちよくシャセイさせてあげるからねっ」

言うが早いか、ショーツの両側をつかむと、それを一気に引き下ろした。

「んっ……!!」

最後の覆いを取り払われ、濡れそぼった亀頭や竿の粘膜が外気に触れて、真弥はその冷たさに身震いする。

「すごおい……真弥ちゃんのおちんちん、いつ見てもおっきいねえ……真奈の手のひらくらい大きくて、真奈の手首くらい太い……」

真奈の声も、次第にうっとりとした響きを帯びてくる。屹立する肉棒が、その手にぎゅっとなつかまれて、

「んっ、真弥ちゃんのおちんちん、あったかい……どくん、どくんっていつてる……」

「はっ、はっ……」

先走りによる気化熱と、少女のひんやりとした指先によって冷やされているはずなのに、肉棒はなおも熱を帯び、血潮をたぎらせて脈打っている。海綿体は丸々と膨れ上がり、張つめた表皮が引きつれて痛いほどだった。

その猛々しい益荒男を、

「よしよし、いいこ、いいこ……」

真奈は左手で竿をつかみ、右手の中指と人差し指の腹で、優しく亀頭を撫で始めた。

すでに十分に潤った亀頭は、ちよくせつ撫でられてもほとんど痛みはなく、ただ純粹な快感だけを伝えてくる。

「いっ……!!」

とたんに真弥は絶頂に達し、その腰が、真奈の体重を乗せたまま跳ねるように浮き上がった。たつぷりとあふれ出した我慢汁が妹の手のひらを濡らすと、くちゆくちゅと淫らな音を立て、耳からも真弥の理性を蝕んでゆく。

「うっ、あ、あっ……！」

いっそ射精させられてしまえば楽なのに、それすらも許してはもらえない。快樂と苦痛、幸福と屈辱とが表裏一体となった地獄で悶絶しながら、「お姉ちゃん」の指先に翻弄されるだけだ。

「ふふっ、いっぱい出てるね、真弥ちゃん。もうちよつとでシヤセイだから、それまでいっぱい、いっぱい、気持ちよくなってね……」

朦朧とする意識に、「お姉ちゃん」の声がしみ込んでくる。

「ほおら、真弥ちゃん。我慢しないで、イって、イって……」

「い、イク、イっちゃううっ……！」

真奈の声に導かれるまま、真弥は何度も絶頂を繰り返す。

激しく痙攣する肉竿を、ぎゅっつかむ手の冷たさ。

赤々と充血する亀頭を、優しく撫でる指先の感触。

ひとこすりされるだけでも絶頂に至り、また次のひとこすりでも絶頂を迎える。

それはまるで際限のない階段を駆けあがっているような、快樂に次ぐ快樂。

理性の籠が弾け飛び、だらしなく開いた口から虚ろな声が漏れて、

「あっ、ああっ、あっ——」

びゅう、

と、その先端から、ついに大量の精液が噴き上がった。

ちよつと指先が鈴口から離れた瞬間だったため、精液は一〇センチ以上もの高さを噴水のように飛び上がった。しかしやがて重力に負け、真弥の下半身や真奈の手に、雨のように降り注いだ。クリーム色の粘液塊があちこちに飛び散り、雨上がりの草むらのようなにおいが立ち込める。

「わあっ、いっぱい出たね、真弥ちゃん。ん……でも、まだおちんちん、ちっちゃくならないね。もうちよつと、なでなでしてあげよっか」

「ま、待って、真奈っ、もうっ……」

真奈の指先は、止まらない。

射精直後で感度が最大まで上がっている亀頭を容赦なく撫でまわされると、再び大量の精液がほとばしり、先ほどと同様にあたりを汚した。

「ほーら、もっと、もっと……」

真奈は優しくささやきながらも、容赦なく亀頭を撫でては射精を促す。三度、四度と繰り返すたび、次第に精液が薄くなり、ほとんど透明な状態に近づいてもお構いなしだ。

「……っ、……、……………」

頭が真っ白になるほど圧倒的な快感に、真弥はもはや声も出せない。

わななくように息を吐きだしながら、ただただ激しい射精を繰り返していたが――

「……うん、やっと、おちんちんちっちゃくなつたね」

ようやく満足したように言うと、真奈はひよいと、真弥の上からどいた。

枕元にあるキャビネットの上からティッシュを数枚とると、まずは丁寧に自分の手を拭いて、それから真弥の下半身やネグリジェ、ベッドシートに飛び散った精液もふき取ってゆく。

「はあっ、はあっ……ご、ごめんね、真奈お姉ちゃん……」

それを見る真弥の胸に、罪悪感が押し寄せてくる。妹に朝勃ちの処理をさせてしまうなど、兄としては屈辱以外の何物でもない。

だが――

「ふふっ、大丈夫だよ、真弥ちゃん」

真奈は優しく笑うと、真弥の顔を覗き込んで、その頭を撫でる。

「だって真奈は、真弥ちゃんのお姉ちゃんなんだから。真弥ちゃんが困ってたら、ちゃんと助けてあげるのが役目なの。だからそんな泣きそうな顔しないで、笑ってちょうだい。ね？」

「う……うん……」

(いいのかなあ、これで……)

「お姉ちゃん」に慰められ、いくぶん心が軽くなりながらも、まだ完全に「妹」にはなりきれない真弥だった。

そこへ突然、勉強机のあるスペースと仕切っているカーテンが開き、寝室スペースの闇が払われた。

逆光の中、高卒の子持ちとはとても思えないほど若々しい母親が顔を出し、

「真奈、真弥、ご飯の時間よ。早く着替えて、おきてらっしゃーい」

「はあい！」

「は、はあい！」

真弥たちは慌ててネグリジェを脱ぎ始めるのだった。